

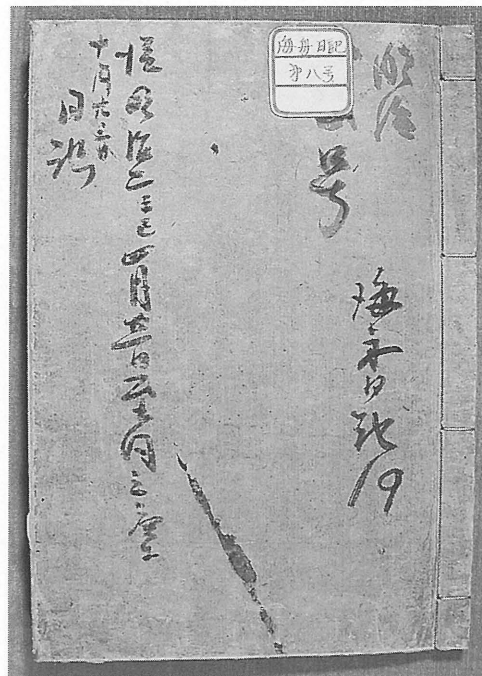
江戸東京博物館史料叢書

勝海舟関係資料

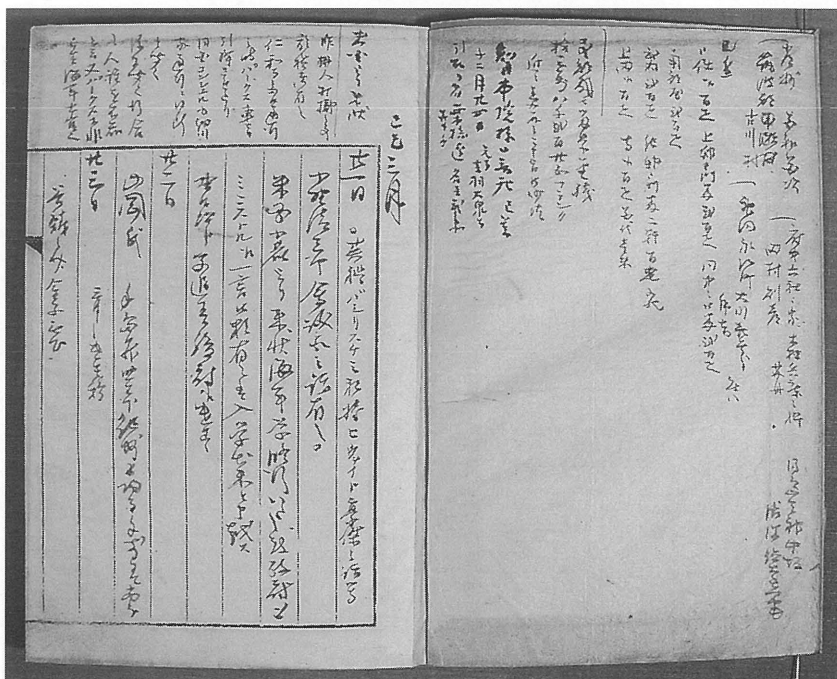
海舟日記

(四)

東京都江戸東京博物館  
都市歴史研究室編

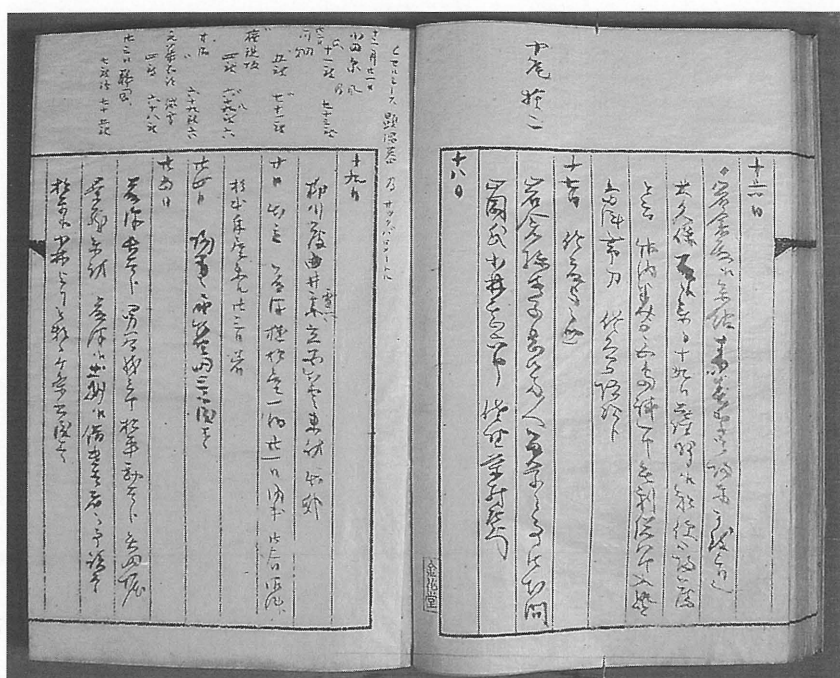


1. 「海舟日記 八」表紙

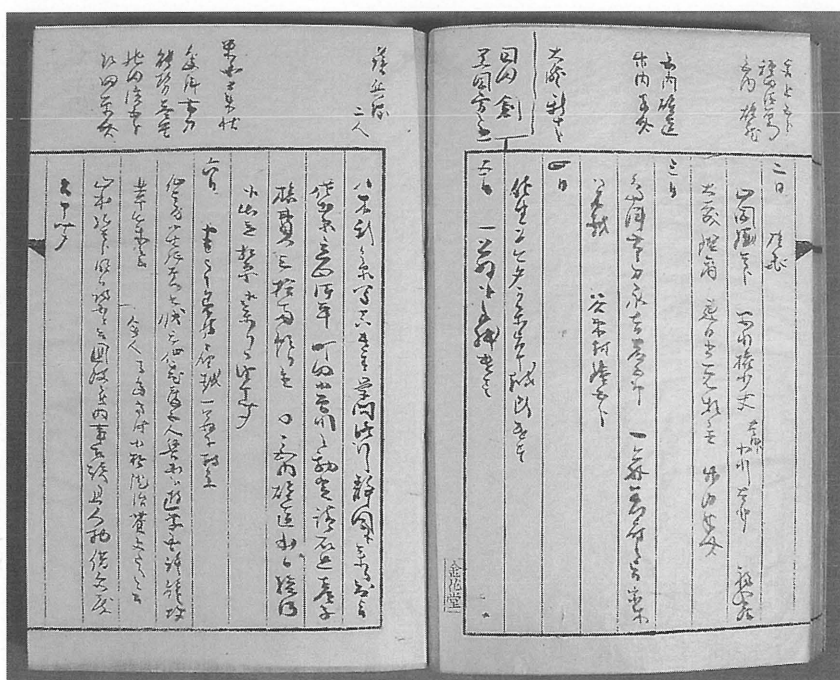


2. 見返しの書き込みと1頁

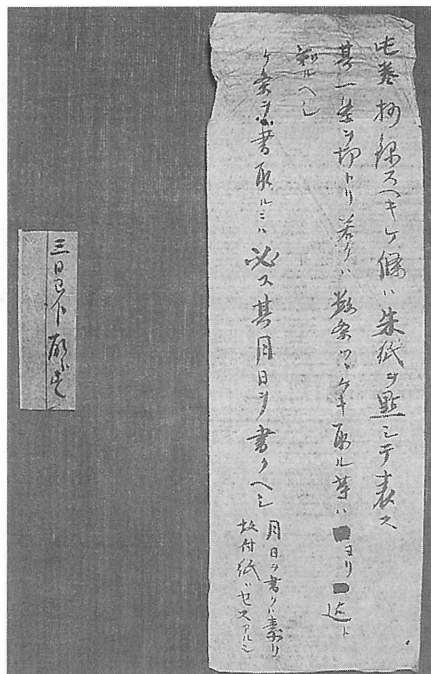




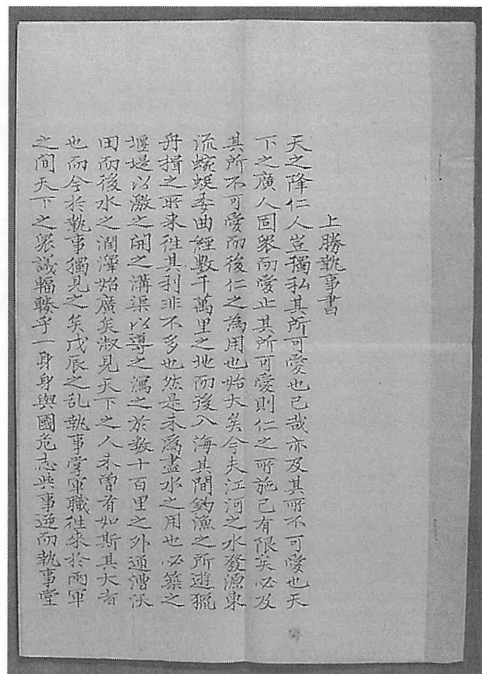
5. 明治二年十二月十九日条の上欄注記



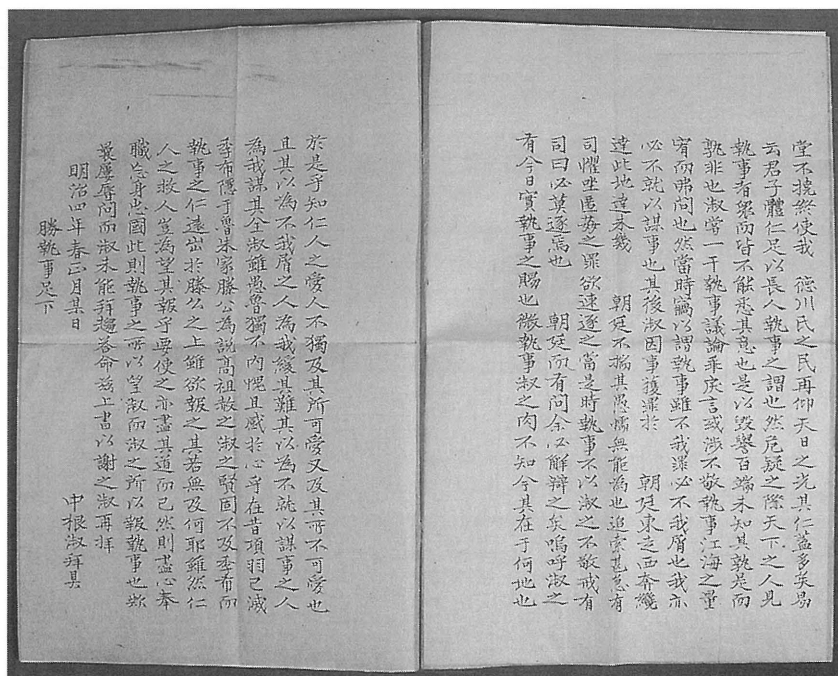
6. 明治三年九月五日条の上欄注記



9. 付属資料 ②(右) ③(左)



7. 付属資料① 中根淑上書 (1)



8. 付属資料① 中根淑上書 (2)

目次

凡例

海舟日記 八 (明治二年三月二十一日〜同三年十月二十三日) ..... 1

解説 藤田英昭 ..... 126

【付録1】「海舟日記」第八冊所出の主要人名辞典 田原昇 藤田英昭 ..... 136

【付録2】「海舟日記」第八冊所出の静岡藩関係者データ ..... 144

## 凡 例

一 本書は、東京都江戸東京博物館所蔵勝海舟関係資料のうち、「海舟日記」第八冊（資料番号94201704）を翻刻したものである。

一 本文編は、中段を本文とし、上段に原書罫紙欄外に記された補記などを記し、下段には本文等に登場する人名を中心に註を適宜付した。なお、註に記す藩名は、版籍奉還から廃藩置県までに使われた名称を用いた。また静岡藩については、駿河府中藩の名称もあるが、ここでは静岡藩に統一した。

一 翻刻にあたり、原文書の様式を尊重するようにつとめたが、編集の都合により、原文書の形態を損なわない程度に、つぎのようにした。

- 1 日付は、便宜上ゴシック体にした。
- 2 文中に適宜、読点（、）および並列点（・）を加えた。

3 漢字は、当用漢字・常用漢字にあるものは、原則としてこれを用い、ないものは正字を用いた。また、異体字は「扣」「抔」は原表記のままとし、それ以外は当用・常用漢字に改めた。

4 宛字・誤字・衍字はそのまま表記して、右傍に（ママ）（衍力）を付した。正しい文字がわかる場合は、右傍に（〇〇力）と記した。ただし、以下の文字は「海舟日記」で常用されている宛字で、文字の用法としては的確ではないが、とくに注記はしなかった。

阪（坂の宛字）      義（儀・議の宛字）

大低（大抵の宛字）      太夫・太輔（大夫・大輔の宛字）  
なお、宛字のうち「趣」の意で多用されている「赴」については、読む上での便宜上「趣」に統一した。

5 変体仮名は、原則として同音の平仮名に改めたが、助詞の「而」「得」「江」「之」は原文表記のままとした。

また、「箇所」「斯様」「一箇」などの「カ」「コ」を表す  
ケは残した。

6 合字は平仮名にあらためた。

7 欠損、または判読不明の文字は、□□(字数分)、「」  
(字数不明)で示し、触損などは右傍に(虫損)(欠損)  
と記した。

8 踊り字は、漢字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は  
「ヽ」を用いた。大返しは「／＼」(字数分)を用いた。

9 本文中の補記や加除訂正は、原型を活かすようにつと  
め、当該箇所の訂正あるいは削除された文字に見せ消ち  
「々」を付した。

10 朱書は、右傍に(朱書)と記した。

一 巻末に、本書の解説を付した。

一 本書の編集は、左記の者がおこなった。近松鴻二(当館  
学芸員) 田原昇(当館専門研究員) 高山慶子(同)

藤田英昭(中央大学大学院生) 大沢恵(学習院大学大学  
院生)

一 なお、当館では、「海舟日記」を含む勝海舟関係文書の  
マイクロフィルムによる閲覧を実施している。「江戸東京  
博物館史料叢書 勝海舟関係資料 文書の部」(平成十三  
年刊)に、「江戸東京博物館所蔵勝海舟関係文書 マイク  
ロフィルム版目録一覧表」を付したので、あわせて利用い  
ただきたい。



江戸東京博物館  
史料叢書

勝海舟関係資料 海舟日記 (四)

発行日 平成十八年二月二十八日

編集 東京都江戸東京博物館  
都市歴史研究室

発行 東京都  
財団法人 東京都歴史文化財団

東京都江戸東京博物館

〒130-0015

東京都墨田区横網一丁目四番一号

TEL 〇三―三六二六―九九一八 (研究室)

FAX 〇三―三六二六―八〇〇二

印刷 (株) 勝田印刷

ISBN 4-924965-54-5C0021